

# 日英村落史的対比研究方法論・2011<sup>1)</sup>

高橋基泰

## はじめに

本稿は、目下筆者が取り組む日英村落史的対比研究において、どのような方法と分析視角を用いるかを考究する<sup>2)</sup>。その対比 (parallel and contrast) 研究では、相違の強調をする比較ではなく、相似を見出そうという姿勢をとる。これまで日本と英国双方の研究チームを組織し、その対話を通じて日本では、本モノグラフの対象である旧上田藩上塩尻村を、英国ではケンブリッジ州ウィリンガム教区を中心に研究が進行中である。

この日英村落の対比研究という方法は、対象同士に異なる特徴を見出すことではなく、むしろ相互の独自性を認めた上で相互の相違・共通性を発見していこうという問題意識に由来するものである。人は違う点よりも共通する・似ている点の方が多いからである。比較して優劣を競うものではなく、対比による認識の共有・相互理解を通して創造にむすびつけるものになることを望んでいる。

## 【方法】

ここではまず、方法を示し、日英対比という点でどのような基準を持ち込むかを簡単に整理する。その上で、よってきたるところを方法論およびその背景となる学説史概観として述べていきたい。具体的手順としては2段階になる。まず第1段階としていわゆるモノグラフの叙述。通史および社会経済史を描く。次いで、第2段階としてそれぞれのモノグラフをもとに対比用のフレームワーク (準拠枠) にあてはめる。そこで見出される事柄を、共通・相似・相違の順で叙述する。

### 第1段階：一般的叙述 (通史・モノグラフ)

ここでは、東ねれば人々の生活風景そのもの、あるいは生活世界ということになるであろうが、項目として個別に見ていくと一般に用いられているような意味での事柄となる。

- ・人間
- ・人間集団
- ・領主

1) 本稿は、筆者が代表研究者である、平成23年度科学研究費補助金基盤研究B (海外学術調査)「西洋における「家」の発見：日欧対比のための史的実証研究」・同基盤研究B (一般)「市場経済形成期における奉公人の系譜：近世労働力市場の日英村落地域比較研究」・同挑戦的萌芽研究「日欧家系譜・家系情報群の社会経済史的立体表現による系譜学と歴史学との架橋」および研究分担者である同基盤研究 (B) (海外学術調査)「市場経済形成期における村落の共同性の日欧比較研究」(研究代表者：長谷部弘)の研究成果の一部である。

2) 日英村落それぞれのモノグラフはすでに、日本では最近モノグラフシリーズの第1巻および別巻を刊行した上塩尻村研究グループ (長谷部弘・高橋基泰・山内太編著『近世日本の地域社会と共同性－近世上田領上塩尻村の総合研究I－』刀水書房, 2009年; 同編著『飢饉・市場経済・村落社会－天保の凶作からみた上塩尻村－』刀水書房, 2010年, 英国では拙著『村の相伝：近代英国編－親族構造・相続慣行・世代継承－』(刀水書簿, 1999年)がある。

- ・(物理的な) 家屋
- ・共同利益地ないし共有地 (入会地)
- ・集落そのもの
- ・自然環境
- ・社会・経済組織
- ・親族集団
- ・相続・相続慣行

まず、一般的な対照表にするとスペースの都合上、部分的にしか表現できないが付録のようになる。

第2段階：対比可能なフレームワークにあてはめ、共通・相似・相違の順に叙述

これらの事象を、対比可能な一定のフレームワークにあてはめる。この場合、上塩尻研究を通じて醸成され、長谷部弘氏により整理された、行政・経済・社会それぞれの側面における村落の共同性の多層性を前提とした準拠枠を援用するのが、最も適合的である。

共同性の構造 [1]：領主支配・村落内行政に構造化された「共同性」

= 村方三役 (英国では村役人・教会役人等)・年貢徴収組・五人組 (英国では十人組)・治安維持等の行政社会組織 (英国では教区行政組織)

共同性の構造 [2]：経済生活 (生業) における経済的「共同性」

= 農業にかかわる「共同性」

→ 労働力の調達組織および土地・水・山林の維持管理組織 (英国では耕地役人・沼沢地役人等)

= 市場経済活動にかかわる「共同性」

→ 市場活動対応型の同業組織・商取引の資金融通・講 (金融組織：英国では教区宗教ギルド等)

共同性の構造 [3]：社会生活における「共同性」

= 同族集団における「私」的共同性：親類・親戚・本家と分家等々の同族組織 + 姻戚関係 (婚姻期間) (英国の場合、一族や親族集団)

= 近隣関係・冠婚葬祭・宗教集団関連の生活諸組織<sup>3)</sup>

これでもって、対象とその文脈を対比する。第1段階での理解をさらに高次の観点から再検討し、新たな知見を得ることを期待できる。

対比研究は、互いの歴史的現実を互いに理解し合うための技法であり、既存・既知史料の新解釈・再活用に始まる広義のコミュニケーションである。広義のコミュニケーションというのは、進行する市場経済化とそれに対応する人と人とのつながりについて共感をうながすからであり、互いの歴史的独自性を尊重し理解するための技法を身につける筋道を示すからである。さらに、対比

3) 長谷部 弘「比較研究のための覚え書き」累積研究会報告 (2009年7月5日 於東京工業大学キャンパス・イノベーションセンター・愛媛大学サテライト東京 (田町)) および同「家連合同族・姻戚関係 佐藤 (藤本) マケを事例として」日本村落研究学会第59回大会報告 (2011年10月29日 熊本県小国町)。なお、( ) 内の英国の場合についての箇所は筆者。援用をご快諾いただいた長谷部教授に感謝する。

研究は、相手との「翻訳」可能性を最大限に利用する。「翻訳」はそれぞれの「現実」についての認識を深める。そして、相手を理解していることを伝えるために、各対象において、既知・既存のものを最適の組み合わせ・順番で表現することにより、全く新たな意味を生み出すのである。それゆえ、対比項目もその都度深化し、多様になる。

以下の項目は、とくに文脈全体の中におくことで新たな光をなげかけることになる女性について、上塩尻の状況において想定されるものである。

- ・婚姻や移住による移入
- ・働き手として。労働の内容。家事労働は労働全体でどの程度のウェイトを占めるか
- ・世代の違い（例：姑はどういったことについて嫁に語ったか）
- ・子どもへの態度・取り扱い
- ・奉公人への態度・取り扱い
- ・生産 自家生産の割合
- ・技術習得 学校・家庭
- ・相続・形見分け
- ・家畜の扱い
- ・日常の食事・採光、余暇の過ごし方・祝祭・語り

項目は、もっと多くもできるが、それぞれの項目で光を投げかけることで、相互に連結する部分もありうるし、また、いずれにせよ研究の深化によりその都度設定する必要がでてくるはずである。

## 【方法論】

対比研究は、既存・既知史料の新解釈・再活用に始まる、啓発性の高いコミュニケーションである。まず、歴史史料の新解釈・再活用は、対比可能な共同性の構造と不可分である。そして家系譜を含む既知・既存史料の新解釈・再活用という点で、日英双方には豊富な情報源が認められる。さらに、対比研究の基礎をなす学説史間・史料間・データベース間の照合は、多様な文脈を多層なものとしてそのまま示す。また、近年の技術の進展によるデータベース・データセット構築はこうした照合を対比研究として必然化させるし、前提ともなる。今や、この分野での技術の進歩もハードからソフトに重点を移す時機になったといえる。

## 1 広義のコミュニケーション

### 1) 相互理解の技法を身につける筋道

ここでは、それぞれの歴史的な「現実」を相互に理解し合うための技法を身につける筋道を示したい。大局的には、進行する市場経済化とそれに対応する人と人とのつながり、という点において過去から現在に通じる共同性の位相を探る。そのために考案されたのが本論で述べる対比研究である。転じてみると、現代の問題に歴史的経験を活用するための方法、とも見なしうる。対比研究は、共感し理解するための技法であるため、分析視角・分析方法そのものが相対化されて

いるからである。

互いの歴史的独自性を尊重し理解するための技法を身につける筋道をたどるべく、ここで対象とするのは、差しあたり日英村落であるが、理解のための技法を修得できれば、それは他にも広く通用するはずである。それゆえ、各国・各地域ないし各コミュニティの歴史を理解する、というよりは、それらの歴史を理解する技法を身につけるための道筋を模索することになる。

まず行うべきこととして個性を一般的に語る。歴史であるから、時系列上の個性を語る。言い換えると歴史的独自性を一般的に語る。生硬な物言いを許されたい。これまでに提唱されたことがないからである。強いて近いものをあげると、森本芳樹名誉教授の提唱する「類推の比較史」が近い<sup>4)</sup>。が、ここでは方法をより明確にすることを目している。対比研究ではそれぞれの研究史の蓄積を互いに適用する。すると、それぞれには既知の事柄も、もう一つの対象に適用すれば自然に異なる観点・立場から新たな光を投げかけることになる。その際にも相違点を強調するというのではなく、共通・相似を見出すという姿勢で対象にあたるので、従来の比較史と同じ対象であっても、より高次の知見が得られる。歴史資源のリサイクル、と言ってもよい。

## 2) 翻訳可能：対比研究は、相手との「翻訳」可能性を最大限に利用する。

比較の場合、差異がむしろ強調される。したがって、翻訳不可能な事象に焦点があてられる傾向が強い。ところが、実際には確かに珍奇なもの・翻訳不可能なものもあるが、全体から見ればそれは少ない。そしてその少ないものに注視していたのが従来の差異を強調する比較であり、優劣の価値判断につながったのである。それゆえ対比研究ではその反対に、大部分をなす翻訳可能な部分に力点を置く。対比項目は翻訳可能であり、用語集で整理できる（高橋HP参照<sup>5)</sup>：進化形歴史用語集）。

なお、対比研究は学際的であるとともに国際的である。そのため研究公表は日本語のみならず英語（外国語）でもおこなう。このときは、極めて一般的な知識のうえに、用語の説明などをしたうえで、研究の概要を紹介する。できれば英語で同様の枠組みを持つ研究があればよい。それをなぞった文章を全体の3分の1くらいあててもかまわないほどである。

## 3) それぞれの「現実」

歴史的独自性は、「それぞれの現実」と深く関わる。そして日々の暮らし・家族・健康・食べ物などともに年中行事に代表される季節性が、当時の人にとっての現実であり、あるいは現代に生きるわれわれにとっての現実である。他方、自然に左右されることの多い生活であったがために、意外にも非常時とは、少なくとも不自然あるいは非自然なものではないのである。自然環境の「異常」はあくまでも人間にとってのものであるからである。例をあげれば、英国本国でのモノグラフ研究は、首都ロンドンに接したエセックスを中心に史料が大量に残りやすい比較的豊かな村落を対象にしている<sup>6)</sup>。したがって、現象として凶作はあったにせよ、飢饉は実感がなかった、

4) 森本芳樹「序論 史料論の確立と国際比較への途」、鶴島博和・春田直紀編著『日英中世史料論』日本経済評論社、2008年、13頁。

5) <http://www.cpm.ehime-u.ac.jp/cpm/staff/index.html>

6) 本稿・学説史(270頁)を見よ。

というのが通例になる。日本の場合になるが上塩尻今昔の会でも、居合わせた現地住民の方々は、そもそも上塩尻では飢饉の影響は無かった、という認識で共通していた。

#### 4) 既存既知のものを最適の組み合わせ・順番で表現

ここで述べたいのは、すべてを新たに生み出すのではなく、生産資源・資本・習慣を含めて既存既知のものを最大限に利用することで新たな状況に対処するのが、最も効率がよいということである。進化と言い換えてもよい。そこには最適の組み合わせと順番で表現する筋道がある。これは、対比研究を行う際、分析軸となる共同性の構造とは不可離の視点である。すなわち、共同性の構造を対比するため必要な史料自体の対比作業に導くのが歴史史料の再解釈なのである。その際着手しやすいのが、地図ないし年表あるいは系統図において各史料の所在を明示する試みである。歴史分析のための理想的な世界を設定し、それに上塩尻の史料群がどのくらいあてはまるのかを、対比することになる。これはそのまま西洋社会にも適用できるだろうし、用語集や建築史とも関連させることも可能である。現実対象-史料界-歴史表現界、というように媒介項に史料界を設けることにより、現実対象と歴史表現世界との往来をスムーズにする。

英国の、日本との際立つ違いを示すデータは日本にない史料からのものである。私的所有のあり方と家族との関係は日本と際立つ違いを特徴としていたが、まさにその点が教会検認記録、なかんずく遺言書・検認会計記録という日本には存在しない史料を中心になされたものだからである。もっとも英国では主要史料である遺言書は日本でも全く無縁でもなく、意外に要所所で現れてくる。

また、英国社会経済史からの問いかけとして次節の学説史で詳しく触れるM.スパフォドの著作にも、歴史資料の再解釈が認められる。対比研究史の見地では、スパフォドの研究は、既存既知史料の新解釈・再活用により、人間の現実を描くために必要な立体的アプローチを実現したことで、評価できる。先に述べてしまえば、本対比研究は、スパフォドの貢献である「歴史史料の再解釈」を発展させるもので、既存データの新活用という側面をもつ。くわえて、英国においても家系譜を用いて得られる親族集団（同族）についての知見が期待できる。

## 2 データベース間の照合

データベース・データセット構築はその照合を対比研究として必然化させるし、前提である。このことは、技術の進歩において、重点をハードからソフトに移すということでもある。研究においても個別史料・個別事例のみならず、総力戦すなわちデータベースの組み合わせが求められるようになってきている。これは、PC技術の発展・低価格化に支えられる。だが、社会経済史の分野でも研究スタイルとして主流となりつつあるデータベース構築型研究は、必ずしも当事者たちがそのように自認しているわけでもない。対比研究に従事する筆者だからこそその認識とも言えるかもしれない。いや、筆者にしても、データベースやデータセットの組み合わせ方について十分に表現し、論じるといったことを自覚的におこなってきたとはいいがたい。すなわち、近年の技術進歩の速さもあって、ほとんど前例がないのである。それゆえ、方法としての対比は、データベース間の照合が前提となる。さらにデータセットないしデータベース間の照合が対比研究には

必要であるため、相互の理解および利用が要となる。

分析枠のそれぞれの枠組みについて検討する中で、とくに対比研究が効果を発揮すると予期しうるのが「家」・婦人層・人口変動の文脈である。

### 事項1：「家」

日本の「家」について論じるときに、家名・家業・家産そして家格の4つの要素は重要であり、それらの現れ方の強弱はあれ、西洋社会でもこれらの要素を各地域において拾い上げることができる<sup>7)</sup>。他方、相続の見地からも今一度接点を見出すことを試みる。英国では単独相続から分割相続まで一続きのヴァリエーションがあることがわかっており、他方、日本の分家にも、あるいは相続慣行の実践において、やはり一続きのヴァリエーションがあるからである。

まず、それぞれの史料上の相続・分家のタイミングの差異を観察する。系譜学での主要資料である家系図ないし家系情報上の相続・別家（分家）のタイミングと歴史人口学の主要資料であり、社会経済史上重要史料である宗門改帳上の単位分けとの時間差をたどりながら、縁組のなされ方を総合的に把握するのである。また、貫高や土地保有規模など経済的要因も考察する。相続・分家とのタイミングも測る必要がある。それらが、家系図にどうあらわれるのか、宗門改帳の「分家」とどう重なり、どう食い違うのか、を総体として見る。英国の場合でも同様である。

### 事項2：婦人層

歴史資料上の存在としては、資料を生み出す社会を反映し、女性は男性に比して劣格である。このことは、程度の差はあれ、日英双方に通じる。したがって容易に想起するのは、教区登録簿もそうであるように、宗門改帳の場合にも女子であることで記録から漏れやすい状況があったのではないかということである。英国で言えば、非国教徒の社会経済階層的分析がそのことを示唆している。とくに、婦人層に顕著に見られる非国教徒の社会横断・世代連続的ネットワークの存在が新たに実証されている<sup>8)</sup>。そして、これらの事象は対比研究において対象になりうる。たとえば、女性が関与しているものとしては宗教ギルドー講がある。英国においては宗教改革において断絶を見、その後機能は分化した。貧民救済は救貧法で、小口金融は遺言書での遺贈などを経て専門職によりなされる一方で、エール醸造はホップ醸造に次第に代替されるとともに醸造業者が専ら生産の中心となる。ところが、日本では少なくとも名称としてはその組織は現代にまで続く。それゆえその歴史を供することで英国の事例に新たな分析視角を提供する。文脈をもとらえることでこれまで限界上にあった対象をも浮かび上がらせるのである。

### 事項3：人口変動

さらに人口変動も、最近の歴史人口学国際シンポジウムのテーマが如実に示すように、その文脈とともに浮かび上がらせる段階に来ている<sup>9)</sup>。上塩尻では、すでに「生産人口」「従属人口」

7) 「家」については、すでに國方敬司・永野由紀子・長谷部弘編著『家の存続戦略と婚姻－日本・アジア・ヨーロッパ－』、刀水書房、2009年において、婚姻戦略と存続との観点から国際比較の試みがなされている。

8) M. Spufford, ed., *The World of the Dissenters* (Cambridge, 1995) .

9) S. Kurosu, T. Bengtsson and C. Campbell, eds., *Demographic Responses to Economic and Environmental Crises* (経済および環境的危機への人口学的対応), Reitaku University, 2010は、2009年に行われた麗澤大

のデータがあり、それを従弟や姻戚とも関わらせて考えることも可能である<sup>10)</sup>。たとえば、本来社会的存在としての分家は経済的にはどのように現れるのか。この点は本来社会的存在としての従弟が労働組織として把握されるのと同様である。cousinageは方法論においても用いることができそうである。従弟については、日本でも柳田国男の「オヤコ・イトコ」論以来、家のあり方と関連して論じられることはあっても、実は決着を得ていない<sup>11)</sup>。労働組織の有り方とも関わるからであり、労働組織という可他方で奉公人の存在があるので、労働経済学だけでも十分な説明ができず、社会学だけでも扱える問題ではなかった。まして、近世期に遡るとると社会経済史の領域になるが、当該分野では家系図はほとんど導入されていないというのが現状である。なぜなら、歴史人口学的アプローチでさえもが市民権を認められてきたのがここ20年ほどのことだからである。ところが、現況の歴史人口学が最も不得手とするのが、この「従弟」の扱いなのである。

### 3 多層共同性と多様性の態様（パターン）抽出

#### 1) 多層性・多様性の扱い

対比とは、上記のように軸ないし準拠枠を設けて照合することである。そして、他に新たな地域でも同じ手続きをすることができるようになりたい。そこに準拠枠を設けることの意義があるし、もともと対比は狭い意味において、軸を決めて照合するパターン認識だからである。そのために、重要なのは適当な対比項目をたてることである。その対比項目は、相互の研究の深化・データベースの拡大により増加することになる。

日英村落においては共通・相似点が指摘でき、対比のための基準・項目はむしろ多い。それらを束ねれば、方法のところ述べてのように、おそらく人々の生活風景そのもの、あるいは生活世界をとらえることになる。他方、個別に見ていくと一般に用いられているような意味で比較が可能な事柄になる。対比項目は、相対化されるので、従来の項目に加えて、相対的分析視角と対象の多層性から自然に導出される社会横断と慣行とが、考察の範囲に入ってくる。

生きており、存続しゆくネットワークであるコミュニティは、多層であり、多様・多機能である。communityはcommunitiesなのである。それは、人と人とのつながりを意味する共同性の重なりである。言うまでもなく、生きている人間によってつくられているコミュニティはやはり生きている。生きているから多層多機能である。市場経済化により観察が可能になるコミュニティなのだが、ひるがえればまさに市場経済化がその多層性・多機能性を進展させる。ネットワークも家族という再生産の基礎が抜け落ちれば、時系列的展開はたどれない。また、家族を数世代という長い時間でたどるには、やはりコミュニティを対象にするほか無い。家族がなくともネットワークはありうるが、家族を構成要素としないコミュニティは考えられないからである。家族を

∟学国際人口学セミナー（組織者：黒須里美）でのペーパーをまとめたものである。

10) 長谷部・高橋・山内編著『飢饉・市場経済・村落社会』19-22頁。

11) 柳田国男「家閑談」『柳田国男全集』ちくま文庫12（1990年）所収、328-30頁。

構成要素とした多層ネットワークであるコミュニティは、存続のための種々の技法が相い伝えられる舞台である。これは、縦の関係のみならず横の関係でとらえて現れてくるものであるし、それゆえに対比可能なのである。

## 2) 「家」の存続およびコミュニティにおける世代継承の理解

学説史でも、「家」の存続ということで、すでに先行研究としてミドルのゴフにおいては「家」の存在は確認できる<sup>12)</sup>。日英に共通する要素として、家系を目しているわけだが、その場合にやはり対比研究が有効である。「家」が共通・類似するのは存続を基本原理とするからである。そして世代継承では、家名・家産・家業の永続性を根幹とする「家」ないし家族の継承とともに村・コミュニティにおける世代の継承を扱う。

## 3) 重層構造を時系列上に指定すると重層時間としてみてとることができる。

重層する「家」「セミ・ネットワーク」「村」「広域ネットワーク」を時系列上にたどる。個々の「家」のみを追いかけてきたのが系譜学であるが、それでは村やネットワークは視野に入らない。他方、系譜学・家族史的視点を導入しない経済史でも閉却してしまう。ここで求められるのは、重層構造をそのまま把握するということなのである。その重層性は、農業生産におけるタイム・マネジメントとしても年中行事と絡めて照射される。また、拙著『村の相伝・近代英国編』の3要素である親族構造・相続慣行・世代継承も捉えかえすことができる。共同性も、共感のスキルという見方でやはり重層的に論じうる。これまで、そうした対比やパターン認識のようなアプローチが十分に発達していないために研究対象としても十分に取り上げられることがなかった素材にも照射がなされるようになる。上述の姻戚関係や家系譜がそうであるし、世帯単位で分析が必要な労働人口・消費人口、年中行事（時間）、そして遺言書でも同様である。

## 4) 多様な多層体は一定の態様（パターン）に収束する。

このようにして、個々の教区の多様性が前面に出てはくるだろうが、それでも多様性には一定の態様（パターン）がある。あるいは、最終的にいくつかの態様には収束する。家系譜研究を社会経済構造に指定し、パターン認識として抽出しようというのであれば、社会的遺伝とは切り離せない。

## 4 展開1：縁組・姻戚・市場経済

### 1) 社会的存在である同族・姻戚・奉公人は市場経済化の労働力市場・近距離移動の文脈で考察する必要がある。

社会的存在としての分家は労働組織においては従弟として現れる。これは英国でも共通するだろうか。あるいは、本来社会的存在としての分家は経済的にはどのように現れるのか。この点は本来社会的存在としての従弟が労働組織として把握されるのと同様である。同族というと日本だけの感覚にも陥りがちだが、英国の場合でさえ、上述したように旧新大陸間の親族のつながりとそのイメージ化は可能になる。その際のキーワードは従弟（cousins）である。もっとも表記上は従弟とあってもそれが現代と同じように4親等だとは限らない。これは東西を問わずそ

12) R. Gough, *The History of Myddle* (Hammondsworth, 1979) .

うではないか。

## 2) 商品経済化の文脈で同族とその補完としての姻戚をとらえていく

縁組に関して、家単位で分析を行う場合でも、通常は宗門改帳のみを用いることになるため、家・同族、すなわち本家一分家を軸とする系譜関係にまで論究した研究は管見の限りでは見あたらない。さらに「姻戚」がある。実際には婚姻史の関係から論じられることが多いが、それを同族との補完関係において商品経済化の文脈で論じる必要がある。同族の研究はその補完として姻戚関係をも分析対象として意味を持ちそうだ、ということをおが研究グループは最近共通の認識としている。世間からすれば当たり前のことのようにだが、実際には同族という観点で村落社会を対比研究しようなどという発想は研究者間にもほとんど絶えてなくなっているのである。

## 3) 縁組・近距離移動・労働力市場とはどの程度重なるのかを探る

縁組について、とくに嫁取りは労働力獲得としての分析が中心である。ただ、上塩尻の場合には実際にどれほど重要であったのか。この点は、季節労働・近隣の労働力市場との関係でも再考する必要がある。なぜなら「社交圏＝世間」の地理空間の広がり、研究の深化を待っている。この場合に対比という見地で共通性・相似が認められるのは、人々の「社交圏＝世間」の地理空間の範囲である。これを系譜データと組み合わせる事でおそらく親族関係ネットワークが重層をなして現れると予測される。現段階ではすでにある程度分布はつかめているものの、親族関係網の調査は未着手である。これを近距離移動の議論とつなげる。

## 5 展開2：慣行の二重性を時系列で

市場経済におけるタイム・マネジメントの変遷を、慣行に関する一定のスケールでたどる。英国の最近の研究では、年中行事は太古からのものと思われてきたが、実のところは僅かな例外を除いてほとんどすべてがせいぜい一六世紀初頭以降のものであり、それは、市場経済の進展と密接に関わるのである。年中行事としての対比は可能であり、時間の使い方にしても然りである。タイム・マネジメントというとらえ方が近世期にもそのまま適用可能であるかどうかはまた議論があるだろうが。タイムスケールという点では、3日・3月・3年・30年（1世代）・3世代、とおそらく最大でも3世代で十分であろう。この「慣行化スケール」（仮称）をあてはめてみていく（注 日本の子孫一身の法や英国の俚言「紳士を作るには3代かかる」など3世代でくる物の見方というのは古今東西種々観察できる）。時々の経済状況により農業上の、あるいは日常生活の慣行が意外なほどに急速に生成もしくは変容するという事態は相続上の慣行でも生じていた。相続慣行には慣行のまさにその静と動の両面をみることができる。制度としての相続慣行と実際の運用である相続実践とである。このような慣行の二重性について人々は通常区別をしない。それこそ、家族について広くも狭くも言うように。それゆえ相続慣行を含めた慣行の二重性は家族と同様に概念広狭をも生むゆえんであると筆者は考えている。

## まとめ

こうした状況を踏まえ、方法としての対比は、データセットおよびデータベース間の照合が前提となる。まず、史料間の対比が、村落社会と家族との観点では、相続・分家、同族の創出・変容・多様化を示す。また、これまで実態がよくわからなかった講も含め、婦人層社会横断・世代継承ネットワークも新たに照射される。そして人口変動も、その文脈とともに扱う段階に来ている。とくに家の存続・コミュニティの世代継承は多層をなし、多様であるため、時系列上の対比研究が有効である。対比の項目が示すように、生きており存続しゆくネットワークであるコミュニティは、多層であり、多様・多機能である。

さらに重層構造を時系列上に措定すると重層時間としてみてとることができる。重層する「家」「セミ・ネットワーク」「村」「広域ネットワーク」を時系列上にたどるのである。従来ほとんど個々の「家」のみを追いかけてきたのが系譜学であるが、それでは村やネットワークは視野に入らない。他方、系譜学・家族史的視点を導入しなければ経済史でも閑却してしまう。したがって、求められるのは重層構造をそのまま把握するということである。その過程で、社会的存在である同族・姻戚・奉公人は市場経済化の労働力市場・近距離移動の文脈で考察する必要がある。キーとなる慣行は、制度と運用という二重性を内包し、概念の振幅もあるため、一定のタイムスケールで測る。相続慣行も含め、慣行はできあがった「制度」としてだけでなく、生成し変化するプロセスもたどる必要がある。

## 【学説史概観】

### 1 対比研究導出の経緯

対比研究ではそれぞれの研究史における蓄積を互いに適用する。すると、それぞれには既知の事柄も、自然に異なる観点・立場から新たな光を投げかけることになる。その際にも相違点を強調するというのではなく、共通・相似を見出すという姿勢で対象にあたるので、従来の比較史と同じ対象であっても、異なる解釈が得られるのである。

もともと本対比研究は日英村落研究チーム内の対話中に始まった。そして直接の契機は英国チームの代表であるマーガレット・スパフォードとのやり取りに求められる。また、対比研究史の見地では、スパフォードの研究は、既存・既知史料の新解釈・再活用により、人間の現実を描くために必要な立体的アプローチを実現したことで、評価できる。そこで対比研究は、スパフォードの貢献である「歴史史料の再解釈」を発展させ、既存データの新活用という側面をもつのである。

1974年にスパフォードは*Contrasting Communities*においてケンブリッジ州における3つの対照をなす教区の社会経済史を描いた<sup>13)</sup>。同書は、「レスター学派」の学風に沿い、それまでの近世農村社会経済史に関する議論を集約し、対照をなすケンブリッジ州の三教区を対象に、農村に生活する人々について家族・親族関係のレベルまで深めて洞察した。それ以前の研究で描かれたのは平均的人物、経済人であった。たとえばレスター学派の創始者の一人W.G.ホスキンスによる『ミッ

13) M. Spufford, *Contrasting Communities* (Cambridge, 1974)

ドランド農民 *The Midland Peasant*』は、村落コミュニティの連続性を示したが、そこに描かれる農民は当時の書評によれば抽象的なabstract 経済人であった<sup>14)</sup>。また、J.サースクの『16世紀の農業問題 *The Peasant Farming*』でのリンカン州の農業経営について、各時代に個々の地域類型を示した<sup>15)</sup>。その主要史料であった遺産目録からの数量データは、平均値もしくは中位値の分析を主にしていたため、ホスキンスと同様の抽象化により、「経済人」ではない人間像、その人間や家族が示す共同性の明示はほとんどなかった。

スパフォードは、より具体的な生活者としての農民を描こうとする<sup>16)</sup>。地域コミュニティである村落の社会経済史の研究は、人体を構築するような作業が必要であり、まず骨格を作る。その骨格は、租税記録および土地調査記録などからなる教区住民の経済・社会的階層を示すデータ集であり、管区巡察記録 (visitation records) をもとにケンブリッジ州全体の横断的分析データ集である<sup>17)</sup>。これらのデータ集の併用は前例がなく、従来ほとんど未知であった宗教改革期における農民レベルの対応を包括して示した。

さらに骨格に肉付けをするのに大きな役割を果たすのが教会検認記録、である。とくにM.スパフォードが嚆矢となった遺言書の教区全体での体系的分析は、家系図の採用ともあいまって家族・親族関係と相続慣行の理解におおきく寄与している。教会検認記録では、一見数値化しやすい遺産目録の方がJ.サースクを代表にレスター学派でもよく用いられていた。遺言書の方は、教会登録簿とともに系譜学の分野では古くから用いられていたものの、社会経済史の分野の体系的使用はスパフォードが最初であった。その後、遺言書は地域社会経済史では必須史料となるが、それでも家系図を組み込み従弟など近親以外の親族関係にまで俯瞰した研究は、後述のケントの研究を例外としてほとんど見あたらない。

社会経済史の伝統を継承し、深化・拡大を自認するスパフォードにとっては意外かもしれないが、教区レベルでの遺言書の体系的利用とともに家系図を作成し従弟をも含む親族関係網により村落の社会・経済生活を説明するという着想は、むしろ社会人類学的である。レスター学派の実地調査・フィールドワーク重視の伝統も関連する。かくして、家系図の社会経済史的分析への採用は、スパフォードを先駆とする。家系譜を用いて得られる親族集団 (同族) についての知見は、必ずしも家系図が残されていないイギリスの農民層においても家系情報を系譜に仕立て上げ、さらに親族集団と村落社会の文脈において相互連関を調査する際にすこぶる有用である。

## 2 *Contrasting Communities*以後とその影響

他方、スパフォード自身、前掲書には2点主要な過ちがあるとする<sup>18)</sup>。1つは対象3教区をあた

14) W. G. Hoskins, *The Midland Peasant* (Leicester, 1957) ; E. Moir, 'Review of *The Midland Peasant*', *The Cambridge Review* (1957) , pp.148-9; M. Spufford, 'The scope of the enquiry', in do., *Figures in the Landscape* (Aldershot, 2000) (拙訳「調査の範囲」国際比較研究会編『国際比較研究』第6号 2010年), pp.2-3.

15) J. Thirsk, *The Peasant Farming* (Leicester, 1957).

16) M. Spufford, 'The scope of the enquiry', p.3.

17) M. Spufford, 'The scope of the enquiry', p.10.

18) M. Spufford, 'The scope of the enquiry', p.7.

かも各々孤立した小宇宙のように描出したことであった。相互連関を欠いていたのである。もう1つは読者に退屈だろうと方法論にあえて頁を割かなかったことである。これらの過ちはその後の研究を地に着かない社会史に偏するのに一助となったし、典型性の議論を拡散させた、というのがスパフォードの反省である。当時の農村に暮らす人たちの現実を描くには農業・経済の諸状況・制約から離れて考えることはありえない。この意図からすると、その後の農村社会経済史の動向は、必ずしも納得のいくものではない。動向は大きく3つの流れに分けられる。

第一にあげるべきは、「ターリング・インパクト」(中野忠)現象を生んだライトソニアン(K.ライトソンの社会史の流れを組む研究者)の動きである<sup>19)</sup>。地域史研究は、1970年代のいわゆる新社会史研究の流れを見、K.ライトソンおよびD.レヴァイン著『貧困と敬虔 *Poverty and Piety*』以降社会史へ傾いた<sup>20)</sup>。農民の社会を扱うのに、必ずしも農業・土地経済によらずに議論する傾向が目立つ。また社会階層分化の観点から大衆政治・文化史や犯罪などにも議論が及ぶものの、経済過程、とくに土地保有の変遷および農業経営の分析には史料の欠落もあり限界がある。ターリング教区で決定的なのは、教区が5つのマナーに分割され、共同用益地もなければ開放耕地制度もなかったことである。次いで、ライトソン以降の研究では、人口動態についてはその都度の歴史人口学の水準に準拠した上で相当分量を割くようになっている。*Contrasting Communities* では、人口動態については人口の推移を示すにとどまった。そして第3の流れは、地域社会経済史の分野への社会人類学の急速な接近である。この点では歴史人類学を標榜するA.マクファーレンが代表となる。

そして、以上の3つの流れはいずれもエセックス州の研究成果が主である。エセックス学派というくりはないが、上記ターリングやマクファーレンの『ラルフ・ジョスリンの家族生活』の舞台となったアールズ・カウン(Earls Colne)教区もやはりエセックス州に属する<sup>21)</sup>。その後J.フレンチおよびR.W.ホイルによる同教区の研究は、マクファーレンの研究チームがウェブ上に公開したデータベースに依拠し、その影響力の大きさは今後も続くはずである<sup>22)</sup>。さらに早期囲い込みが概ね完了した16世紀初めまで、大黒死病(the Black Death)以後16世紀初頭までのエセックス州全体の研究は、L.R.プースがまとめている<sup>23)</sup>。その姿は、他州で17世紀以降進行する事態を先取りしている。この点では、王領地という特殊事情を抱えるロンドン近郊のヘイヴァリング教区も同じである。本教区については、M.K.マッキントッシュがまず1200年から1500年までを研究し、引き続き1500年から1620年までの近代初期期を継続して優れた包括的地域研究を著している<sup>24)</sup>。

1つの教区を中世から近代まで通して観察する研究は依然として僅少である。上のマッキン

19) 中野忠『前工業化ヨーロッパの都市と農村』成文堂 2000年、19-48頁。

20) K. Wrightson and D. Levine, *Poverty and Piety in an English Village: Terling, 1525-1700* (London, 1979)

21) A. Macfarlane, *The Family Life of Ralph Josselin* (Cambridge, 1970)

22) H. R. French and R. W. Hoyle, *The Character of English Rural Society: Earls Colne, 1550-1750* (Manchester, 2007)

23) L. R. Poos, *A Rural Society after the Black Death; Essex 1350-1525* (Cambridge, 1991)

24) M. McIntosh, *Autonomy and Community* (Cambridge, 1986); do., *A Community Transformed* (Cambridge, 1991) .

トッシュを除くと、めぼしいものとしてレスター州の研究があげられる。一つは古典としてすでに紹介したW.G.ホスキンスのウィグストン・マグナ教区の事例であり、もう一つがC.ハウエルのレスター州のキプワース・ハーコート (Kibworth Harcourt) 教区の研究である<sup>25)</sup>。当教区ではオックスフォード大学のマートン学寮の所領の、1270年から1700年までの長期にわたり、ミドランド農民の家族・土地・相続慣行の研究をした。遺言者の家族扶養義務とともに各々の遺言者とその家族の置かれたライフ・サイクルの重要性を指摘した上で、一定程度の家族が保有地を保つことを実証した。農業経営の内容と近親間の協働・相続の実態の分析もあるものの、横断的な親族関係や共同耕作あるいは共同用益地に関する記述に乏しい。加えて、中世後期から近世までを意識的に架橋したものとして、J.ウィットルの研究も挙げておきたい<sup>26)</sup>。1440年から1580年までのノーフォーク州東部ヘヴィングラム・マナー (Hevingham Bishops) のマーシャム (Marsham) 村を中心に土地市場および労働者・労働力市場に関して著した。農業資本主義の発展をテーマに、共同性については家族の土地保有に付随する共同用益権に言及はあるものの、そもそもそうした視点がないからだと思うが、ハウエル同様横断的亲族関係や共同耕作については立ち入った分析はない。だが、遺言書を集中的に用い家族の土地保有と相続慣行の詳細なデータが収録され、今後の比較研究に有益である。

一方、スパフォードの2つの「過ち」に対する反省は、炉税記録の全国的レベルでの翻刻・研究分析計画という炉税調査記録プロジェクトを生む<sup>27)</sup>。炉税記録は17世紀後半の教区民の経済的社会的状況を容易に鳥瞰できる史料である。近代統計学の祖グレゴリ・キングもこの炉税に深く関わった。炉税は直截簡明さを特徴とする。家屋の外に出ている排気口(煙突)の本数から、その家屋ないし世帯の炉の数を割り出し、富裕度すなわち担税度を測るからである。炉税はこれまで有名でありながらも、十分に活用されてきてはいない。本炉税プロジェクトの完成による全国的俯瞰は、歴史地理学者H.C.ダービーによるドゥムズデイ・ブック時代の経済地理全国誌に比肩し得る意義をもち、情報量でははるかに多いデータ・ベースとなる。これは日本にはないので、学ぶところが大きい。

他方、*Contasting Communities* では示唆にとどまった相互連関と結びつくのが、「社交圏=世間」の地理空間の広がりである。対比という見地で共通性・相似が認められるのは、人々の「社交圏=世間」の地理空間の範囲である。これを系譜データと組み合わせる事で親族関係ネットワークが重層をなして現れると予測される。

加えて、スパフォードとその研究グループによる非国教徒社会経済階層分析は、地域史研究者にとっては自明であっても、宗教史・教会史家にとってはそうでもなかった。この分析は婦人層ネットワークをも見出した。中世後期から近代初期にかけての女性の経済的社会的位置づけに関して、系統だった包括的研究が著されてきている。ここでも新史料の利用とともに既知史料の新

25) C. Howell, *Land, Family and Inheritance in Transition* (Leicester, 1983)

26) J. Whittle, *The Development of Agrarian Capitalism: Land and Labour in Norfolk* (Oxford, 2000)

27) 現在、英国学術炉税プロジェクトBritish Academy Hearth Tax Projectとの連携で公開されている最新のものは、*Warwickshire Hearth Tax*, British Record Society, *Index Library*, 126, 2010.

たな利用法の開発によるところが大きい。北部教区の親族関係と世帯について女性の視点から論じたM.チェイタ、寡婦産相続と女性の財産を扱ったB.トッド、女性の法的権利について慣行および法律の相互可変性を中心に論じたT.ストレットンなどはその好例である<sup>28)</sup>。そして、A.エリクソン『近代初期英国における女性と財産』は、法律と実践との関係を、とくに女性と財産とを中心にして論ずる<sup>29)</sup>。

スパフォードは、歴史人口学への違和感を次第に認めるようになってきているものの、日英村落対比研究にあたっては、歴史人口学的分析も用い方によっては極めて有効である。片方では同時代人にとっての現実をとらえる姿勢を保ちながらも、同時代人の気づかなかつた、かつ後代のわれわれだからこそ見渡すことのできる事象あるからである。対象間の比較には人口学的データは、とっかかりとしては大いに有用なのである。日英双方で全国を教区・村単位にデータ・ベース化が最も進むのはこの分野である。その一環として農業・地理データとの重ね合わせはたとえば、農業奉公人研究で著名なA.クスマウル<sup>30)</sup>によって、工業化以前のイングランドにおいては結婚の季節性と牧畜・穀作の分布パターンと概ねの合致をみるとする著作によって既に用いられている<sup>31)</sup>。炉税データがこれに加わることでより立体的な検討を予期できる。

M.スパフォードとはあらゆる点で対照的なA.マクファーレンは、もともとは歴史家としての訓練をオックスフォード大学で受け、その後ケンブリッジ大学で社会人類学を専攻するようになるが、その最初の論文で出した産業革命の原因についての着想を発展させ、結実したのが『イギリスと日本*The Savage War of Peace*』である<sup>32)</sup>。工業化がはじまる前にイングランドは出生率および死亡率の低下をみせ、それが来る産業革命の前提条件のひとつとなったのはなぜか、という問題については、日本との比較を経て解明の糸口を見出せるとする。イギリスと日本という二つの島国を比較し、環境および健康というマクロおよびミクロ的アプローチを結合させ、とくにイングランドにおけるエールとそれに続く茶の飲用と日本での同時期の茶の飲用という習慣づけを含め、生活習慣全般での共通性を見出す。最終的には文化習慣の文脈で家族・相続にいたって、経路はちがうものの同様の結果を生むにいたった複雑多岐なメカニズムの存在を指摘している。マクファーレンは全国的範囲で二次歴史文献を遍く渉猟し用いながらも、やはり社会人類学の著作となっている。

マクファーレンの基本姿勢には問題がある。『イギリスと日本』で二つの島国を比較し環境と個人との双方の連関をメカニズムとして説く際に、家族および「家」をあくまで文化習慣としてとら

28) M. Chaytor, 'Household and Kinship: Ryton in the Late 16th and Early 17th Centuries', *History Workshop*, 10 (1980) ; B. Todd, 'Free Bench and Free Enterprise: Widows and their Property in two Berkshire villages', J. Chartres and D. Hey, eds., *English Rural Society, 1500-1800* (Cambridge, 1990) ; T. Stretton, *Women Waging Law in Elizabethan England* (Cambridge, 1998) .

29) A. L. Erickson, *Women and Property in Early Modern England* (London, 1993) .

30) A. Kussmaul, *Servants in Husbandry in Early Modern England* (Cambridge, 1981)

31) A. Kussmaul, *A General View of the Rural Economy of England, 1538-1840* (Cambridge, 1990) .

32) A. Macfarlane, *The Savage Wars of Peace* (船曳建夫監訳、北川文美・工藤正子・山下淑美訳『イギリスと日本 マルサスの罫から近代への跳躍』新曜社、2001年) .

えるものの、それをコミュニティの文脈に措定して議論するということがないからである。マクファーレンは中世からすでにイギリスにおいては個人および個人を成り立たせる土地保有権も個人に帰属するように早くから確立していたとする<sup>33)</sup>。彼は、小農 (peasant) は存在しないとし、その存在基盤である「家族の土地」の親族関係内での循環的性格 (cycling nature) についても否定的である。まして家族を村落・コミュニティの文脈で可變的にとらえるということもしていなかった。

マクファーレンは、イギリスでは所有が血縁に優先するようになり、日本では「イエ」という人為的に構築された連続体として後継者戦略を決定したとする。後者では「イエ」の存続のために養子制度を活用したが、前者ではそもそも養子制度がない。だが、イギリス農村にも「家」が18世紀までごく普通に存在したことはR.ゴフの「ミドゥル史」にもあらわれている<sup>34)</sup>。D.ヘイは1970年代の研究水準でこのゴフを主幹史料として描き、ゴフのミドゥル史を住民の移動・リエイジ・アイデンティティの関係から再考している<sup>35)</sup>。ここで、家の観点からこれらを読み返してみるとまた発見があるはずである。とくに家系・人口移動・地域特有の相続慣行・土地保有状況、さらにコミュニティそのものについて異様に詳しい。

他方、ケント州ウィールド地帯の小邑クランブルック (Cranbrook) およびその隣接村教区における17世紀後半期の横断図を描いたA.プールの著作は、教区境を超えておよそ半径10キロメートル程度の形成される地縁-血縁関係網の働きを明らかにした<sup>36)</sup>。

なお、1978年にV.スキップが『発展と危機』でフォレスト・オブ・アーデン (Forest of Arden) における5つの教区を主として人口と環境との相関関係を著したが、生態学的アプローチによる特殊研究という色合いが濃い<sup>37)</sup>。遺産目録を集中的に用いて農業生産・自然環境・生活資源との連動性を描き、あわせて教区登録簿により家族構成・家族構造分析を行ったが、遺言書はほとんど用いられておらず、教区内・教区間の親族関係も含め危機の局面で発現したはずの共同性についての視点が無い。むしろ、翌1979年に刊行されたA.B.アップルビーのイングランド北西端部のカンバーランドおよびウェストモアランド両州における凶作 (飢饉) および人口・環境の動態研究の方が、方向づけとしては共同性についての観点を内包していたが、アップルビーの急逝によりそれは果たされていない<sup>38)</sup>。さらに、最近ではJ.ブロードが1540年から1920年までの期間をとり、英国農村富裕層が土地所領と家屋を含む景観の構築をどのように果たしていくかをバッキンガム州ミドル・クレイドン (Middle Claydon) 地域において観察している<sup>39)</sup>。

33) A. Macfarlane, *The Origins of English Individualism* (London, 1978) (酒田利夫訳『イギリス個人主義の起源』リポレポート 1993年)。

34) R.Gough, *The History of Myddle*.

35) D. G. Hey, *An English Rural Community. Myddle under the Tudors and Stuarts* (Leicester, 1974) ; C. Dyer, ed., *The Self-contained Village?: The social history of rural communities 1250-1900* (Hatfield, 2010)

36) A. Poole, *A Market Town and its Surrounding Villages: Cranbrook, Kent in the Later Seventeenth Century* (Chichester, 2005)

37) V. Skipp, *Crisis and Development* (Cambridge, 1978) .

38) A. B. Appleby, *Famine in Tudor and Stuart England* (Stanford, 1978)

39) J. Broad, *Transforming English Rural Society, The Verneys and Claydons, 1600-1820* (Cambridge, 2004) .

日英村落史対照表

イギリス				
	Wigston Magna	Chippenham	Orwell	Willingham
州	レスター州中央	ケンブリッジ州北東	ケンブリッジ州南西	ケンブリッジ州北西
(研究者)	W. G. Hoskins	M. Spufford		
(年度)	1957	1974		
分類	Upland (高地)	Upland	Upland	Fen-edge (沼沢地縁り)
土壌	重粘土層中心	白垂軽土壌	重粘土層	沼沢重粘土
面積 (約, エーカー)	3000	2000	1500	4700
領主	元来小自由土地保有者 多数	旧修道院領→世俗領主	王領	旧修道院領
共同地 (入会)		800エーカー→囲い込 み	元来小さい	大きい
作物	豆・大麦が主	ライ・大麦が主	大麦・オート麦が主	大麦・小麦
家畜	羊重要 (混合農業)	羊→領主独占化		大型家畜
16・7世紀の人口 動態	70世帯 (1525) →140 世帯 (1625)	5・60世帯で停滞	50世帯ほどで停滞	400人 (1525) → 700人 (1670)
土地の配分状況	階層分解静態的	1560年～1630年, 特 に	チベナムと同様	土地保有細分化
	18世紀には階層化	1598年～1630年に分極 化		
コミュニティ組 織	強力	薄弱	有	強力
宗教組織	国教色強し	非国教色散見	非国教色有力	非国教色強し
相続慣行	傾向として長子単独	分割の傾向	長子単独と分割混在	分割相続が主 (状況次第で単独)
寡婦産	生涯不動産権	生涯不動産権	時限不動産権→扶養	時限不動産権
	# 古典			
出典	W. G. Hoskins, <i>The Midland Peasants</i> (London, 1957)			
	M. Spufford, <i>Contrasting Communities</i> (Cambridge, 1974)			
	D. Hey, <i>An English Rural Community. Myddle Under the Tudors and Stuarts</i> (Leicester, 1974)			
	V. Skipp, <i>Development and Crisis</i> (Cambridge, 1978)			
	K. Wrightson and D. Levine, <i>Poverty and Piety in an English Village - Terling 1525 - 1700</i> (London, 1979)			
	C. Howell, <i>Land, Family, Inheritance in Transition</i> (Cambridge, 1983)			

Myddle	Forest of Arden 5教区	Terling	Kibworth Harcourt
シュロップ州	ウォリック州	エセックス	レスター州
D. Hey	V. Skipp	K. Wrightson	C. Howell
1974	1978	1979	1983
Woodland (森林)	Forest (御料林法域)	Upland	Upland
重粘土層		重粘土層	重粘土層
4500		3000	1500
世俗領主。開墾。小村。	元来小自由土地保有者 多数	5マナー混在、大借地 人の力強し	オックスフォード大学学 寮
大きい		皆無	
		大麦が主→小麦	大麦が主
牧畜経済	牧畜→穀作。肥育→酪 農		馬、牛
3・400人。移民による 増加	2250人(1570)→ 3400人(1650)	70世帯(1524)→122 世帯(1671)	4,500人で静態的
階層分解静態的	自由土地保有は細分化	大農場が特徴	
18世紀には階層化	分極化は2段階で。	分解顕著	分極化というより階層分 化
有		薄弱。	有
国教	国教色強し	非国教色強し	非国教色散見
長子単独相続が主	長子単独相続が主	長子単独相続(裕福な ら分割も)	長子相続が主、実際は 分割も
多様		多様	多様
# 同時代人による叙述	# 人口動態分析に大き く傾斜	# 「ターリング・ショッ ク」	# 1200-1700年までの 通覧

日本				
	南部二戸郡石神村 (旧荒沢村石神)	紫波郡煙山村松ノ木部 落	諏訪郡今井村 (岡谷市北部)	上田藩上塩尻村
県(旧藩)	岩手県	岩手県	長野県	長野県
(研究者)	有賀喜左衛門	中村吉治・共同研究グループ	中村吉治・共同研究グループ	上塩尻村研究グループ
(年度)	1938	1956(1980)	1962	2009年～(1995年～)
分類	農村(溪谷村)	農村	高原村, 領分境目, 塩尻峠口	農村
土壌	沖積層土	地味肥 (沖積層-洪積台地)		度重なる千曲川の氾濫などのため, 扇状地を含め肥沃であるが, 礫土部分も多い。水田も上中下等級差あり。
面積(約, 町歩)			耕地面積狭し(5000畝=500反=50町)	
領主	南部藩。開発大屋は藩士格埜農, 齊藤家	南部藩。	諏訪・高島藩	上田藩
共同地(入会)	山	山, 溜池, 用水路	林野, 山, 用水, 秣場	山, 林野
作物	米, 稗, 野菜, 繭, 漆, 萱その他	米(どころ), 麦, 稗, その他	米, 蕎麦, 粟→桑作も	米, 蕎麦, 粟→桑作も
家畜	馬・牛	馬(代掻, 運送, 厩肥源)	馬・牛(牛方)	馬(少数)
18・9世紀の人口動態	200人±(20件±) →300人±(約30件)	27家	400人±(50家±) →700人±(約150件)	750～800人(*94戸→165戸)
土地の配分状況		溜池作りが大地主化と深く関連。	農民層分化過程顕著	19世紀に1貫を基準に中間層の割合が増加
	大家族一分家名子制度	高利貸, 築堤開田	田畑生産性向上, 用水拡張	用水・山林
共同体組織		錯綜的重層	小族団協業体の拡散, 地主的土地所有	共同性の重層構造顕著
宗教組織	並一仏教(浄土宗)・神道	並一仏教・神道	並一仏教・神道	並一仏教(浄土宗他)・神道
相続慣行		#そもそも対照表がまずイギリスのやり方ではつくりにくい		
寡婦産				
出典	有賀喜左衛門「南部二戸郡石神村における大家族制度と名子制度」(旧稿『アチック・ミュージアム彙報』四三 1939年)『著作集』III。			
	中村吉治『村落構造の史的分析』(旧版1956年)御茶の水書房 1980年			
	中村吉治・島田隆・矢木明夫・村長利根朗『解体期封建農村の研究』創文社 1962年			
	長谷部弘・高橋基泰・山内太編著『近世日本の地域社会と共同性—近世上田領上塩尻村の総合研究I—』刀水書房, 2009年; 同編著『飢饉・市場経済・村落社会—天保の凶作からみた上塩尻村—』刀水書房, 2010年			